Fate/amusement facility

ヒキキ♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／ａｍｕｓｅｍｅｎｔ　ｆａｃｉｌｉｔｙ

【Ｎコード】
Ｎ１０８２Ｒ

【作者名】
ヒキキ♪

【あらすじ】
外部の侵入を拒み、脱出を許さぬ孤島に集まるマスター達。
その裏で糸を引く謎の存在。
静かに始まりの刻が迫る新たなる戦い。

・・・と、中二病っぽいあらすじしてみたけど、難しいね。やっぱ

り。

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　×　遊☆戯☆王デュエルモンスターズ
のクロス・・・カップリング？　オーバー？

とかなんとか。とりあえず、混ぜたもの。

詳細はプロローグ１の後書きで書いてますが―、とりあえず、既存キャラは出しません。（予定）

遊戯王からはカードだけを拝借。サーヴァントに使います。

出来る限り遊戯王カードを知らない人も分かるように描写します。

プロローグ1　暗躍する黒い影（前書き）

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　×　遊☆戯☆王デュエルモンスターズ
のクロス・・・カップリング？　オーバー？
とかなんとか。とりあえず、混ぜたもの。

とは言うものの、かなりの見切り発車で、ちゃんと終着駅に辿り着けるかもわからないです。

おまけに二次創作なんて初めてで、以外と設定とかもいろいろと間違っているかも。

さらにさらに、就活中に私は何をやってるんだ！？　と自分に言いたいね。小説でも書いてストレスを和らげているのだけど、あー、こっちに嵌ってしまったらヤバいな。

後書きで、簡単に設定を説明。

プロローグ1　暗躍する黒い影

――私は餓えていた。

永遠に等しい時間だけを与えられたこの牢獄は、退屈なのだ。

人も、物も、活力も、何も存在しない。あるいは『無』が存在すると表現すべきか。

一切の変化が無いこの世界は地獄でしかない。

少しでも退屈を紛らわすには……やはり楽しいことを探すべきか。

例えば、そうだな、娯楽施設を開くのはどうだろう。

しかも、この娯楽施設で祭りを開くんだ。

楽しいだけじゃ退屈だ。これではつまらない。

悲しみ、怒り、憎しみ、恐怖、絶望、苦痛、バリエーションに富んだ楽しいお祭りだ。

人の心情の変化に勝る楽しい事はない。

人が喜びから悲しみの底まで叩き落とされる光景なんて、想像するだけでゾクゾクする。

どうせ無為に時間を浪費するだけだ。ならば、今から準備をしよう。

何年、何十年、何百年、いくらでも時間をかけて準備をしてやる。永遠に等しい時間を送ってきた私に、準備に要する時間など我慢できる。むしろ、短期間でつまらない物を作るよりは遥かに良い。

なぜかって？

私を楽しませてくれる大切な参加者を飽きさせては、この上なく失礼だろう。

プロローグ１　暗躍する黒い影（後書き）

後書きがながーいです。
【設定】
二つの作品を混ぜていますが、

『Ｆａｔｅ』からは、物語の設定を。

『遊戯王』からは、モンスターをお借りしようかと。ようはサーヴァントとして、遊戯王のモンスターを使役してしまえとかなんとか。ぶっちゃけちゃうと、いちいち英雄の過去の歴史とか調べるのが面倒だったという事情があったりなかったり。どの英雄も魅力的すぎて、悩んでしまったというのもあるのですが。

しかし、私の遊戯王の知識は結構古いです。

今でも遊戯王を嗜んでいる方がおられるのであれば、おそらくシンクロとかリリースとかそのような用語を当たり前のように使っているのかな？

私は生贄召喚とかその時代でしたし、最近遊戯王のアニメを見て驚いた。なんでバイク乗ってるの？　かなり面白かったけどさ。つか、ＺＯＮＥってチート過ぎじゃない？

とりあえず、カードの一覧の書かれているヴィジュアルブックが中古で２００円であったので、持っていない分は立ち読みで済ましま

したが（買えよ）、いやー、シンクロって強い。遊戯王の環境に、間違いなくマズい方向に持っていったんじゃないの？
てなわけで、私の都合上、少し古いモンスターが選ばれるかもしれない。

ただ、それなりに人気のあるモンスターを選びたいんですよね。私としても、その方が物語を構成しやすい。

とまあ、なんかどうでもいい方向に脱線してしまった。

キャラクターはオリジナルでいかせて貰います。既存のキャラクターの細かい性格まで調べるのが予想以上に難しかった。なら、もうオリジナルで良いんじゃねと判断しました。

聖杯戦争のルールも少しオリジナル要素を加えていくかもしれない。

でも、本気でなんも考えていないのが困った。

セイバーのサーヴァントも、主人公のキャラクターも決まっていない。

とりあえず目標は完走。小学生のときのマラソン大会の気分です。

そして最後に、ａｍｕｓｅｍｅｎｔ　ｆａｃｉｌｉｔｙの意味は、（たぶん）娯楽施設。

プロローグ2　次席（前書き）

二次創作がこんなに難しいとは・・・。設定とか何度読み直した事か・・・。
これ、ちゃんと完結する自信がな（ｒｙ

題名だけ変えました。それだけです。

プロローグ2　次席

†

日本海にポツンと浮かぶ、上空から眺めると極めて真円に近い綺麗な形をした島があった。

侑芽島（ゆめじま）。

中央には標高８００メートルの山が屹立し、完全に海で囲まれたその島は、形、人の手がほとんど介入しない自然と、まさに美しい島と言っても良かった。

これだけ美しい島にも関わらず、金に汚れた人間の手に侵略されなかったのには理由があった。

この島は、沖に特殊な強い海流が流れていた。

海流が常に島の沖を流れ、島の外から来る物を拒むバリケードのような役目があったのだ。

だが、島の住民にもバリケードの外に出る事は容易な事ではなく、島の外を知る事もなく一生を終える人がほとんどであった。

飛行場の作る事もままならないので、この大きくもない島に入る手段はヘリコプターといった航空手段に限られた。その不便さから、観光やホテル開発の手を見事に逃れていた。

その島に人が住み着いて、既に何百年も経過しようとしている。

それにも関わらず、この島には不明な点が多かった。

――いつからこの島にいるのか。

――海流を乗り越えて、どうやってこの島に渡って来たのか。

他にも多くの謎があった。だが、誰もその真相を知る者はいない。記録にも残っていない。

いくつもの謎が歴史を探る研究者を悩ませる。だが、ほとんどの住民はそんな歴史に関心を寄せていない。どうでもいいのだ。

自分の立っている大地がちゃんと明日も存在すればそれでいい。人間、そんなものだ。

島に住む人間にはそれでいいかもしれない。

だが、この島の存在の異常性に気づいた者がいた。

歴史家でもなければ、探検家でもない。研究者というカテゴライズは間違いではないが、正確な答えからは遠い。

それは、『魔術師』という、神秘の追求に飽くなき執念を燃やす者だった。

†

「今回の件に関してはいっさい原因不明。究明に力を全力で注いでいる最中なんだろうけど、いちいち対応が遅すぎるんじゃないかしら」

侑芽島に向うヘリの中、女は呆れを滲ませた声で言った。

彼女の名前は雅（みやび）　真理（まり）――肩にかかる程度の黒い髪に、その少しつり上がった猫のような鋭い目。均整の取れた鼻や口と言ったパーツから、客観的に見れば美人と評してもいい。

かつて5度に渡って繰り広げられた、血で血を洗う闘争劇と同じ兆候が、現在向かっている侑芽島でも見られた。

『聖杯戦争』――ここに出てくる聖杯とは、伝承に出てくるような『聖遺物』とは少々異なり、あらゆる願いを実現させる願望機である。だが、願いを叶えられるのはたったの一人。故に、その願望機を巡り、聖杯によって選抜された7人の魔術師による死闘を、このように呼んでいた。

だが、今回の聖杯戦争は大きく勝手が違っていた。

本来６０年の周期で行われる聖杯戦争と似た兆候が、この小さな島に起きていたのだ。

かつて聖杯を再現しようとした御三家は今回の件にはいっさい関わっていないという。

誰が主催者で、どうやって、どうしてこの場所を選んだのか。その調査が行われようとしていた。

しかし、そのイレギュラーな事態である噂を耳聡く知った彼女は、

協会よりも早くこの島に訪れようとしていた。

「協会も対応がトロイのよね。机に座って地図を眺めてたって、何も分からないわよ」

鼻で嗤いつつも、その胸内ではこれから開かれる巨大な祭りに胸を躍らせていた。

真理にとってこの聖杯戦争は大きなチャンスだった。

彼女は魔術協会本部である『時計塔』の最高学府にて次席という優秀な成績を残している。

ただ、本人は納得しているわけではない。次席。つまり2番だ。プライドの凝り固まったような彼女に、そのような半端な数字は到底受け入れられるものではない。

しかし、2年間を通して一度たりとも次席で甘んじていた彼女は、首席候補から外されている。

真理自身、かつては拮抗していた首席との実力差を、徐々に感じつつあった。

さらに、血筋、魔術師としての家柄、そして歴史の全てにおいて劣っている。勝てる要素はほとんど残されていない。

当然、向けられる期待値の大きさは違う。

真理は別段、目立ちたがり屋なわけではない。だが、他者が自分に向けてくる評価に対しては、酷く敏感だった。特に彼女の場合、比較されるのは常に自分より格上の存在である。必然、自分に向けられる評価は総じて悪い。

だが、真理には自分の力だけでその評価を覆すだけの力はなかっ

た。それは、首席に対して白旗を振っていたから。もはや心が完全に折れていた。いくら挑んでも、勝ち目がないと。

それでも、この評価を覆そうとしていた彼女に舞い降りた女神が、今回の『聖杯戦争』だった。

過去の資料を参考にすれば、魔術師が命を賭して戦う危険なものというもの。

だが、今の真理は舞い上がっていた。これは神が彼女のために用意した檜舞台だと。ならば、誰が上がらねばならないか、言うまでもない。

真理には見えた。華々しい未来が。彼女に向けられる周囲の羨望の眼差しが。

彼女は高を括っていたのだ。今回のイレギュラーに発生した聖杯戦争に選抜される魔術師なんて、どうせ大した事がないと。それなら、少しでも早く到着して、『令呪』とやらを貰おうと。

「ようやく見えて来たわね」

そして、夜通しでヘリを飛ばし続けた5時間という空の旅の後、ついに侑芽島が見えて来た。

そんな彼女を歓迎するように、太陽が水平線から姿を覗かせる。

「最高だわ」

そしてついに、この侑芽島に魔術師が降り立った。

プロローグ2　次席（後書き）

肝心のサーヴァントはいつ出るのでしょうね。私が聞きたいです。

かなり進行が悪い。さーて、困った。ちゃんとモチベーションを保てるかな。

どういった展開に持っていこうかでかなり迷ってますから、更新も遅くなる。一週間に一回くらいは更新したいけど、さて、どうなるのでしょうね・・・^^；

プロローグ3　屋敷に住む従者とお嬢様（前書き）

物語が徐々に固まり始めて来た。好物の群像っぽく書いてみようかと考えているが、はてさて、ちゃんと進められるか怪しい物です。

プロローグ3　屋敷に住む従者とお嬢様

†

海岸の小高い丘に、この島で最も大きな屋敷が建っていた。他の家が小さく見えるほど、綺麗で豪奢な家だ。
その屋敷から、海を一望できる部屋に、一人の少女が窓から外を眺めていた。
手に持ったティーカップを、香りを楽しむように揺らしてから優雅に傾け、静かな時間を過ごしていた。
朱寺院（しゅじいん）　麗奈（れいな）。この屋敷の息女である。
一つに括られた髪。健康さを感じさせるスラリと伸びる手足に、活力に溢れた活発そうな表情。だが、粗野なものは一切感じず、どこか静謐さを漂わせた気品があった。

彼女は毎朝、夜明けとともに水平線から昇る太陽と一緒に朝を向けるのが習慣だった。必ずティーカップを片手に、優雅に香りを楽しむのも忘れない。非情に面倒くさい習慣とも言えた。
ただ、昇ってくる太陽だけが楽しみで、この時間に海を眺めているわけではないのだが。

そして、彼女の傍らには従者である男が立っていた。主人に付き合うのも、従者のつとめである。

「貴方の紅茶で、ようやく朝を迎えた気分になるわね」
「そう言ってもらえることを、嬉しく思います」

男は慇懃に頭を下げ、嬉しそうに笑顔を見せた。
東原（とうはら）　守（まもる）、幼い頃から麗奈の身の回りの世話を司る執事である。
凛々しい顔立ちに、直立不動の油断のない立ち姿。この男の笑顔は、ケーキに匹敵する甘い物だ。
代々から東原家は朱寺院家に仕えることば宿命であり、その断りに反する事なく東原もそのレールの上を通っていた。とは言っても、彼には特に不満もなく、むしろ楽しん麗奈の成長を、世話をしながら観察して来た。
身の回りの世話とは文字通り、朝食や夜食の準備だけでなく、学校の送迎、さらに下着の洗濯や風呂の世話までしている。

東原と麗奈の関係はあくまで主従関係であり、また家族である。すでに恋慕の情を通り越し、お互い、男女の関係として見る事はなかった。

いつもの静かな時間を過ごしていたのだが、今日はいつもの趣が違った。

外から、ブォーンと大きな乗り物が飛んでいるようなそのような音が聞こえて来た。おそらくヘリの飛行音だろう。この島に外部のものが誰かやって来たのかもしれない。

この音に、麗奈は不満げに表情を歪め、カチャリと音を立てて受け皿にカップを置いた。

「朝の静寂に広がる波の音色をゆっくりと嗜む事もできないのかしら。不快だわ」
東原も少し苦笑した。
「そうですね。しかし、珍しいですね。こんな島に来訪者とは。観光でしょうか？」

「どうせ碌でもない理由よ。あー、もう。なんか最悪の気分だわ」

突然、麗奈は窓縁にもたれかかると、何かを探すように視界を巡らせる。

むろん、従者である東原に、彼女の行動の意味が分からないわけがない。

「そう言えば、『彼』、今日は遅いですね。どうかしたのでしょうか？」

不機嫌な彼女の怒りの琴線に触れぬよう、言葉を選んで言葉を返した。

「知らないわよ。いつもはこの時間になったらこの砂浜に現れるのに。あーもう、何もかもが今日はいつも通りにいかないわ。気分が悪い」

普段は『彼』が現れる度に、一言二言ほど麗奈に小言を漏らす東原だが、今日だけは黙っていた。不機嫌なオーラを放つときの彼女は、扱いが難しい。

ここのところ、この島ではいろいろと黒い噂が絶えない。物を破壊し回っている変質者や、夜な夜な徘徊する『彼』。これは真実か怪しいのだが、夜の暗がりでたまに遭遇すると言われる、自分と全く同じ姿をした影。『ドッペルゲンガー』とも言われているが、とりあえず、あまり治安がいいわけでもない。

お嬢様として甘やかされて育ってきたからか、我が儘な節がある。この性格に、何人のハウスメイドが泣かされた事か。

そして、悪いときに悪いことは重なる物だ。

コンコンと、扉を叩く音が室内に響いたのだ。

その音を聞いた瞬間、麗奈は表情をますます不機嫌な物にした。対して東原は、『あいたた』と、痛恨の極みと言わんばかりに表情を顰めた。

「お嬢様、食器を下げさせていただいてもよろしいでしょうか？」

その声に、ますます麗奈は剣幕を露にし、「勝手にしろ！」と持っていたティーカップをドアに向って強く投げ、ふんと顔を明後日の方向に向けた。

室内に広がる破砕音に、ピークに達した緊張感。ドアの向こうで立っていたメイドは慌てふためくようにドアを開け、砕けたティーカップを拾い始める。指を切ったのか、痛々しい血が彼女の指から流れていた。

好き嫌いの激しい麗奈は、このメイドが特に嫌いだった。嫌いな理由はトロいからとか、なんとなくとか極めて曖昧な物だろう。きっと名前すら覚えていないだろうが、あのメイドにとっては災難としか言いようがない。不条理な文句をふっかけられたようなものだ。

いそいそと部屋を去ったメイドが去ると、麗奈は大きな溜め息をついた。

「気分悪い」

「お嬢様。あれはいくら何でもやり過ぎではないですか？」

「何よ。あの女の肩を持つの？」

「そうではありませんが、しかし、」

「ならこれ以上は話しかけないで。気分悪い」

そう言うと、また窓から外を眺め始めた。意識していないかもしれないが、『彼』を探しているのだろう。
普段はあまり快く思っていない男に期待するとは、なんとも情けない話である。

いずれ麗奈にも、人の痛みがわかるときが来てくれるのだろうか。きっとメイドの指から血が出ていた事も気づいていないだろう。相手を思いやる大切さを、麗奈はいつか気づいてくれると信じるしかない。
東原が疲れた面持ちで小さく溜め息をついた。

「ところでさ、東原」
「はい。なんでしょう？」

突然声をかけられ内心驚くも、面には絶対に出さない。
そして、麗奈は東原の右手を指差した。

「なんで右手に包帯なんて巻いてるの？」
「え？　いや、これは、その、あの、ははは……」

さて、今朝目が覚めたらよく分からない入れ墨みたいな物があった、だなんて言えるわけもない。

東原は誤摩化すように、愛想笑いを浮かべる事しか出来なかった。
それが彼女の逆鱗に触れるのは、言うまでもない。

プロローグ3　屋敷に住む従者とお嬢様（後書き）

徐々にキャラクターが出そろってきました。しかし、未だに主人公は姿を見せません。
当たり前です。だってまだ私の中で理想の主人公像ができあがっていないから、出せませんし。

あー、サーヴァント・・・まだ決まらない・・・。

プロローグ４　恋するメイドの?ＰＯＷＥＲ（前書き）

なんて意味不明なタイトルなんでしょう。ちなみに私にメイド属性はないです。

後、少しだけプロローグ1を編集しました。少し文字を追加しただけで、特に大きな変化はないです。
プロローグ3には誤字があった。
これからも誤字脱字が連発する作品になるでしょうが、末長い付き合いをお願いします。

プロローグ４　恋するメイドの？ＰＯＷＥＲ

†

ああ、殺してやりたい。
十字架に張り付けにして島中を回してあの顔面の皮膚をはぎ取って生殖機能ぶっ潰して脊髄引きずり出して女の尊厳を全て奪った上で殺すコロス絶対にいつかコロスコロスコロス殺す殺すコロスコロス殺殺殺殺殺……

そんなダークサイドな一面を、彼女は笑顔で覆いながら階段を下りていた。さきほど割れた陶器を拾う際に怪我をした指から、ポタリポタリと血を滴らせながら。

氷舞（ひょうまい）　涼夏（すずか）――彼女はここにハウスメイドとして勤め始めて、まだ日が浅かった。

背中まで達するほどに長い茶色の髪に、小さな鼻に、小さな口。一つ一つのパーツが特別優れているわけではないが、上手に配置されているからか、愛嬌のある可愛い印象があった。
彼女は特筆すべきスキルといったものは特にない。だが、強いて上げるのなら、その笑顔だった。

女の笑顔は、胸に秘めたる狂気を隠す優れた化粧。特に彼女は、あまりにも完成度が高い。鏡の前で１０時間かけて作られた笑顔は、性別問わず相手を惹かせる武器である。

ただ、さすが同性と言うべきか、あるいは真贋を見分ける能力に

長けているというべきか。
どうにもこの屋敷のお嬢様――あの麗奈にはその笑顔は通用しなかった。むしろ彼女には不愉快な物に写るのか、笑顔を見せる度に風当たりが悪くなる。

氷舞は東原のように、この仕事に誇りや生き甲斐なんて物はない。というより、高校を中退し、かといって会社の手足になって働くのも面倒だと思っていると、なぜか親の紹介でここの仕事をさせられている。
面接が一回あったが、笑顔で一発合格だった。それ以来、この屋敷の掃除といった雑務をこなしている。
だが、やる気はいっさいない。ただひたすら仕事をこなしているに過ぎない。それを毎日。毎日。

最初はまだ面白半分で続けていたが、ルーチンワーク化してくると、徐々に飽きて来た。本音、もう止めたい。

だって、職場環境が最悪だ。あの麗華嬢と折り合いが悪い。氷舞の笑顔を見せる行為は、水と油を強引に混ぜようとする行為に等しい。結果、水溶液はぐちゃぐちゃに混ざりあい、最終的にはまた二つに分かれる。

もとより、氷舞には働く意志というものが欠けている。彼女はこの島での生活が飽きていた。しかし、この島から出るには、本土にヘリを要請し、島まで来てもらうしか方法がない。ようは、面倒なのだ。

そういえば、今しがたヘリがこの島にやってきた音がした。だが、その帰りのヘリに乗り込む勇気がない。島を出たところで、橋の下や公園のベンチですごしている自分の未来像のみが見える。結局、

こうやって今の生活に縋り付くしか出来ないのだ。

そうやって彼女は、笑顔を作り続ける。涼しい夏をすごしているかのような、そんな笑顔を。

「こんな下らない島、なくなっちゃえばいいのに……」

そうすれば、否応でもこの島を出なければならなくなるだろう。

こういう極端な考えしか浮かばない。

ただ、氷舞がこの島に居座り続けるのには他の理由がある。

氷舞は、麗華のちょうど二つ下の階の部屋のドアの前に立った。

心拍数が上がっている。インテリアのような金色のドアノブを握ってから、手が動かない。

さっきまでのような狂気が薄れ、今、彼女の胸の内を占めているのは、それは恋の甘い香り。

だが、これは仕事だと強く自分に言い聞かせ、普段の笑顔を取り繕った。

この部屋の住人も極めて早起きだ。なぜなら、この部屋の住人にも、麗華と同じような習慣があるから。

「稔(みのる)さま。お部屋に入ります」

ガチャリと、扉を開けて中に入った。

氷舞に気づいた実は顔を向けると、少年らしい優しくて可愛くて抱きしめたくなるような笑顔を見せた。というか、このままテイクアウトしてしまいたい。

「おはようございます」

ニコッと笑顔を見せると、また窓から海岸を眺める事を再開した。
彼の名前は朱寺院　稔。あの麗華の弟である。
病的に白い肌。触れれば折れてしまいそうなほどに細い腕と足。
端正に整った笑顔の裏に垣間見せる陰りと、どこか暗い印象の受ける子供だった。

稔にも、麗華と同様に『彼』を見る習慣があった。

麗華とは理由は異なる。ひとえに、稔の場合は『彼』に対する憧憬のような物だ。
部屋から出られない彼にとって、毎日のように砂浜に訪れ、海を眺めている姿に何かしらの魅力を感じるのだろう。彼にとって唯一と言っていい、屋敷から見える部外者だから。

稔は恵まれた身体ではなかった。生まれたときから、ずっと寝たきりの生活を強いられている。
それは、身体全体を黒い腫瘍のような物があったから。この島の医者に看せても原因はわからず、下手に手を出せない状況だった。
本土からも医者を派遣させて看てもらったのだが、結果は同じだった。

それ以降、彼は外に出る事もなく、この部屋の住人としてずっと長い時間を過ごしていた。
この部屋は退屈だろう。こうやって氷舞のような一部のハウスメイドがたまに顔を出すだけで、誰も部屋に訪れないのだから。あの麗華ですら、弟に関心をもたない。動かない玩具には、興味の欠片もないのだろう。
この子を見ていると氷舞は、いつか私が攫(さら)わねば……ゴホン、守

ってあげねば、という気持ちにさせた。

「身体の調子はどうですか？」

「うん。大丈夫。特に問題ないよ」

その言葉にほっと一安心。

「それよりも、氷舞さん。その指どうしたの？　怪我してるよ？絆創膏ならすぐに出せるんだけど、使う？」

むしろ稔の方が氷舞の身体の心配をして来た。

「あ……い、いえ、だい……じょうぶです。はい……」

その一言を聞いた瞬間、氷舞の表情が一気に紅葉し、普段覆っている氷のような笑顔が氷解し、あまりの恥ずかしさに俯いた。

そして、胸にどっと押し寄せてくるのは歓喜。

なんてお優しい言葉なのだろうか。指の怪我に気づくだけじゃなくて、よもや心配までしてくれるとは。あのどっかのバカお嬢様とは人間が違う。

だから、この少年に恋なんてしてしまったのだ。そんな些細なことですら、彼は気にかけ、心配してくれる。メイドの氷舞にも、分け隔てのない愛情を分けてくれる。その優しい笑顔を見るだけで、この仕事としての意義を見いだせる。いつかあの笑顔を、自分だけのものにして独占したい。いやそれより彼がこの屋敷を出る事を望むなら、一緒に逃げよう。愛の逃避行だ。そして、島を出て2人で一緒に暮らすのだ。貧しい生活になろうとも、彼を苦しませるような事はしない。清く正しく生きるのだ。そして、いつかは2人の子どもを産む。きっと優しい子になるに違いない。なにせ彼の子だ。

いつか3人で山や海……は飽きるほど見てるか。外国にも行ってみたいな。そうだ、医者の優秀な国に行こう。こんな辺鄙な島にいるような医者なんてヤブ医者に決まっている。外国に行けば、きっとたくさん優秀な医者がいるだろう。そしてそして……（妄想略）。

「氷舞さん、どうかした？」

「……はっ！　いえ、少し夢を見ていました」

フリルの付いたメイドの服の裾で涎を拭いて笑顔で取り繕った。

「疲れてるの？　しんどくなったら、いつでもこの部屋で仕事をサボっていいからね。それで僕の話し相手になってくれると、嬉しいから」

ズッキューンッ！

今、私のハートに突き刺さった。絶対にピンク色の矢が突き刺さってる。

「は、ひあ、えと、あ、ありがとうございます……」

こんなに愛されているなんて、なんて幸せなのだろうか。

こんな優しい子が、何も出来ないなんてあまりにも不憫すぎる。

神様、せめて、彼を元気な身体にできないのでしょうか。

もちろん氷舞の願いが叶うなんて事はない。

だが、胸の高鳴りと呼応するように、右手の甲に、ペタリと張り付くような小さな熱が帯びているのを感じていた。

プロローグ４　恋するメイドの?ＰＯＷＥＲ（後書き）

後数回はそれなりに一定のペースで更新を続けられそうだけど、いつか止まる。

しかし、サーヴァントが一体も出て来てこないね。そしてプロローグがながー・・・

しかも、予定では８か９までプロローグのつもりですし・・・；

キャラ紹介と一緒にサーヴァントを出していこうかしらん?

プロローグ5　新しい住人（前書き）

遊戯王のアニメ、遊星はスゴいね。あのモンスターを召喚するのは、ほとんどムリポに近い。リアルだと、たぶん龍の鏡とかであっさり召喚とか、そういう処置が加えられるんだろうけど。

あと、遊星が金ぴかでしたね。なんか既視感。なんだっけ、主人公が金ぴかになるの。

・・・あー、明鏡止水か。

プロローグ5　新しい住人

†

涼夏が部屋を去ったのを確認してから、どこか疲れを滲ませた溜め息をつき、ゆっくりと天井を仰ぎ見た。

「特に問題ない……か」

さっき涼夏に言った言葉を、稔は確認するように反芻した。

朱寺院　稔。生まれてから１０年以上も外を出歩いた事がない。彼の身体は謎の腫瘍のようなものがあり、この島の医者では手に負えないような状況だった。不用意に手を加えるよりは、現状を維持させた方が良いという名目で放置している。

彼は自身の不自由な身体に関して、なんら絶望なんてしていなかった。だって期待なんて抱いていないから。彼はこの部屋の世界しか知らない。この小さな世界からこんなちっぽけな命が滑り落ちても、世界には何の変化も及ぼさない。

稔にとって人付き合いとは作業である。氷舞とのやりとりもパターン化している。稔の頭の中には、彼女が言われて喜ぶ言葉リストが入っている。彼女は、どこまでも単純だから。

ひとえに、彼は淡白なのだ。そして親切なのではない。相手に嫌悪されないように生きるために身につけた処世術とも言える。これは赤ちゃんの笑顔と同じなのかもしれない。弱い存在だと周囲に認識してもらい、その情緒に働きかけて面倒を見てもらう。実際、氷舞にはしっかりと面倒を見てもらっているので、成功していると言

える。

稔の心はどこまでも幼く、純粋だった。楽しいことを知らず、世界になんの希望も抱いていない。つまらない世界に価値を見いだせない。生きることを面倒にすら思える。だから、簡単に自分の心を封殺することができる。

でも、ようやくこのつまらない人生に終止符を打ってくれる存在が、天から召された。基本的に無感情の彼にしては珍しく、感動に打ち震えた。

なぜ？

神秘と奇跡が織りなす存在と出会ったからだ

それは伝承やお話に出てくる天使じゃなかった。だけど、絶望だけしか見ようとしない彼には、まさにお似合いの存在との出会い。

誰？

それは枝のように筋張った、無駄な贅肉どころか筋肉すらない骨と皮だけのような細い身体。骸骨のような顔は、目の部分が陥没し、その奥では赤い光が怪しく灯っていた。何より特徴的なのは、身の丈にも及ぶ大きな鎌に、くたびれた紫のローブ。

誰もがこの存在を見ればこう答えるだろう。

――死神、と。

突然、彼のベッドの下から、すーっと何かが浮き上がって来た。

「あの女、主（あるじ）に対して、何か特別な思いを秘めているようで。お若いのに、主もなかなか隅に置けないですね」

クックックと、どこか含みのある笑いを漏らした。
「僕の事を心配してくれるんだよ。変に邪推しちゃ氷舞さんに失礼だよ」
「ふむ、左様ですか」
自身の軽率な発言を悔いるように、再びベッドの下にすーっと消えて行った。

稔の部屋には、新しい住人が住み着いていた。

その住人との出会いは、それは半日前に遡る――
稔の身体を覆い尽くす黒い腫瘍のようなものの正体は、それは本来の身体の機能すらも殺してしまうほどに変形してしまった『魔術回路』だったのだ。
本来は文字通り、擬似神経系として身体に巡る路である。だが、なんの奇跡か偶然か悪夢なのか、この稔の身体に巡る魔術回路は、常識外れの数を有していた。それこそ、世界中の魔術師が真っ青になるほどの。
しかし、魔術回路が機能している間は、それ相応の苦痛が襲う。彼の場合、魔術師としての知識を持たず、ましてやまだ人間としても未熟であることが災いし、魔術回路が本来の機能から外れ、異常に膨張し、彼の身体を蝕むことになった。
そしてその黒の腫瘍の存在が、路に流れきれずに溜まっていた魔力の変質したもの。あるいは、魔力のため池とも言える。そこに、何年も何年も注ぎ込まれる事で、彼の身体を苦しめ続けた。
彼の膨大な数とも言える魔術回路が、さらなる奇跡を招いた。魔術回路の一部が、サーヴァントを呼び出す魔法陣と擬似的だが同じ働きをしたのだった。
そして、今に至る――

稔は自分の手の甲を見た。そこには、不思議な幾何学を描く三画

の模様があった。
稔はこれが何か知っている。
むろん、初めから知っていたわけではない。この死神――サーヴァントから得た知識である。

「死神さん。これから、なんだっけ？　何が始まるんだっけ？」
死神と呼ばれた存在はフワリフワリと宙を漂いながら答えた。

「『聖杯戦争』ですよ。あなたもこの遊戯の参加者に選ばれたのです。それより、私は死神ではありません。気をつけてください」

「なんでもいいでしょ。でも、どうやって僕は選ばれたの？」

「さあ？　選ばれる過程までは私は存じませんので、何とも言えません」

「頼りにならないね」

「申し訳ございませんねぇ。フフフ」
顔に筋肉なんてないのに、どこか嘲るような笑いを浮かべているような気がした。この死神、礼儀正しい素振りを見せてはいるが、どうも相手を小馬鹿にするような接し方をしてくる。
当然、そのような反応に、稔は苛立ちを覚える。

「別に君が謝る必要はないよ。謝ったところで何も変化しないし。謝るのなら、こんな面倒事をさっさと終わらせてよ」
稔は言葉に剣を出して言った。

「そう言われましても、まだ始まってもいないので、しばらくは続くでしょう。むしろ、このような貴重な行事を楽しまなければ損で

はないでしょうか？」

その死神の暢気な物言いに、稔は憤懣した。

「戦争でしょ？　楽しめって、本気で言ってるの？」

「私はね、主と魔術回路で繋がっているのです。同時に、少しは主の生い立ちについても情報として私に流れて来ています。私がこんなことを言うのは何ですが、これはきっと主にとっても良い機会になるでしょう」

「……あのね、それだけの綺麗ごとを言ってるけど、何か裏があるんでしょ？」

すると、死神は無表情――なのに、その赤く灯る瞳の奥が、ニヤリと笑った。

「さぁ、どうでしょうねぇ？」

「もう……」

稔は不満げに唇を尖らせた。

稔はこの聖杯戦争の意図を聞かされていない。

なぜ危険を覚悟で、『戦争』などと大層な名前の付いたゲームに参加しなければならないのか。そのメリットは何なのか全く聞かされていない。さらに、この右手にある『令呪』と呼ばれる入れ墨のような不思議な印。これが何なのかも分からない。

おそらく、このゲームの参加者に配られる何か。あるいは、参加者の証だろうとは推測がつく。

「死神さん。この令呪って、一体なんですか？」

「なんでしょうね。参加者の証じゃないですか？」

この一点張りだ。

参加者の証――確かにもっともらしい答えだ。しかし、この『聖杯戦争』。命のやり取りにまで発展するらしい。ならば、この印がただの証の役割しかないのは、あまりにも不可解なのだ。

このような質問をするときだけ、この死神は決まって曖昧な返答をする。

嘘ではない。しかし、これが全てではない。嘘と真を織り交ぜたような陰湿な返答。

この死神は全てを話さない。ならば、安易に信用するではなく、あくまで運命共同体というスタンスで接するのが一番だと判断した。

「じゃあ、辞退とかできないの？」

すると、死神は天井を仰ぎ見、困ったように顎に小枝のような指を添えて考え込んだ。

「本来なら出来るはずです。しかし、昨夜この島を一周してきましたが、どうも教会が見当たりません。ですので、辞退は無理かと。保護してもらうのは厳しいですね。相手にこちらは戦意がないことを示しても、おそらく無駄でしょうし」

この死神が全て真実を語っているとは思わない。

ただ、確かに思い返してみれば、この島には教会と呼べるようなものはなかった気がする。

「なんか、本当に巻き込まれた気分だよ……。別に望んで君を呼んだわけじゃないのに……」

「災難ですねー。……しかし、祭壇も魔法陣も使わず、体内の魔術

回路だけで行うこのような召喚なんて異常なんですがね。それこそ、あり得ない」

「じゃあ、どうして死神さんはここにいるの？」

死神は「分かりません」と、首を左右に振った。その様子は、さっきまでの本心を隠すようなものは感じず、本当に理解できないらしい。

「ですが、今回の聖杯戦争が異常であるのは確かでしょう。それに、これは私の気のせいなのかもしれませんけど、なんていいますか――」

死神は言葉を選ぶように逡巡し、そして窓から外を眺めた。

「――この島は、何かおかしい」

プロローグ5　新しい住人（後書き）

さて、どうしようかと考えた末、強引にサーヴァントを出してみた。
大丈夫、後悔はしていない。

稔をどのような使い方をするかで迷ってる。さて、どうしようかな。

後、真名は出してないですけど、私の描写力でも気づけるかな・・・？

プロローグ6　不死身の男（前書き）

ぶっちゃけ設定とかいろいろ破綻しそう。もう綱渡りしている気分。

タイトルを少し変えさせてもらいました。本文は弄ってないです。

プロローグ6　不死身の男

†

島にざわつく謎の空気。
散見される黒い影の『ドッペルゲンガー』と呼ばれる存在。
直にこの島に訪れる大きな災禍。
男は、侑芽島の異常にいち早く気づいていた。
いや、あるいはこう言う方が正しいかもしれない。
――初めから、知っていたと。

窓を開けて、海から来る潮の香りを堪能しながらモーニングコーヒーを嗜むのが彼の日課だ。
男のいる部屋には、さまざまな機材があった。
妙に寝心地の悪そうなベッドに、天井からつり下げられた空っぽのパック。他には注射器や内視鏡、X線用カメラと、さまざまな医療に関係する器具が所狭しに置かれている。
ここは、この島で唯一のお世辞にも大きくはない病院だった。

男はコーヒーをデスクに置いて立ち上がると、準備運動をするように屈伸をした。
「やれやれ。随分と待たされたものだ。老い先短い老人を待たせるなんて酷いな。なぁ、そう思わんかね？」
男は自分の愛孫を慈しむように、右手の令呪に話しかけて優しく撫でた。

男はこの島で唯一の島医者である。
名は荒畑（あらはた）　草庵（そうあん）。
齢にして既に１００を超えているであろうその老人は、歳不相応に若作りをしていた。
というより、あり得ないほどに若く見えるのだ。
顔には皺なんてどこにもなく、白髪の見当たらない真っ黒な髪の毛、腰も曲がっていなければ入れ歯でもない。２０で見られても何ら不思議じゃない。
だが、彼を除いてこの町で一番の歳を取っている９０を超えた老人の出産に立ち会った経歴から、おそらく１００を超えているであろうと噂されている。正確な年齢は誰も知らない。そして、本人も忘れているし、興味もない。
当然、気味悪く思うものも少なくないのだが、もはや『まあ、そういう身体なんだろう』と、達観している住民も多くいる。
そして、この島にある不思議の一つにも挙げられている。

「老い先短い老人か……。まあ聖杯戦争が終わるまで、死ぬ予定はないがな」
俯き加減になり、クククと残虐に彩られた笑顔で、自虐的な笑いを漏らした。
すると今度は、ニヤリと口角をつり上げると、耐えきれないと言わんばかりに大声で笑い始めた。
「これからではないか！　これからが楽しい祭りが開かれるのだ！　ここで死ぬわけにはいかんな。私も一人の参加者として、楽しませてもらわなくてな！」
しかし、さっきまで意気揚々に笑っていたのに、途端に冷や水をぶっかけられたように感情を感じさせない冷めた真顔になった。

「だが、なぜあんな軟弱なガキに令呪が宿ったのだ。折角の祭りにアイツは相応しくない」

荒畑は稔の主治医だった。というより、この島で一人しかいない医者なのだから、当然と言えば当然と言える。

そして、稔の右手に宿っている令呪のこともしっかりと知っている。最近の定期検診でそれを発見したときは、おもわず驚愕に声を漏らしそうになった。そして、荒畑は令呪の意味は知らない振りをし、稔と二人だけの内緒ということにしている。約束を守っていれば、令呪のことは誰にも知られていないはず。

稔の身体の異常も知っているし、その原因も知っている。知っていて、あえて放置している。

職務を放棄しているには理由はある。もし稔の身体の異常の理由を申告すれば、それはこの島の秘密にも到達されるからである。

令呪が稔に宿ったのは不本意ではあった。

だが、まあそれでもよかった。確かに彼はこの祭りを楽しむことを望んではいるが、それ以上に求めているのは聖杯。これを手に入れるために少しでも強敵の参加者が減るのであれば、それもそれでいいだろう。

とはいえ、実力でも負ける気は毛頭ないが。

なぜか？

――荒畑にはすでに強力無比なサーヴァントを与えられていたから。

「アサシンよ。すでに発覚しているマスターは私を含めて何人だ？」

男は何もない空間に向かって話しかけた。

すると声に反応してか、その空間が陽炎のようにぼんやりと揺ら

めくと、そこからは身長が１８０ある荒畑より少し高い細身の男が姿を現した。
目を黒いマスクで隠し、自身を隠蔽するかのように全身を黒い硬質なレザーのようなもので包み込んでいる。さらに腰に携えるは、巨大な抜き身の片刃の剣。非情に物騒である。

アサシンは膝を付き、忠誠を示すようにマスターである荒畑に平伏し、静かに質問に答えた。

「未だ発現を確認できたマスターは屋敷に住むあの幼子のみです。他は未だ特定できていません」

荒畑は「そうか」と鷹揚に頷いた。
「構わん。お前は少々情報収集を不得手にしているようだしな。気配遮断スキルも、本来のアサシンよりも低いようだし、仕方ないだろう。だが、これからどんどん参加者が現れる。ゲームを少しでも優勢に進めるために情報収集は怠るな」

「はい」
アサシンは静かに頷くと、再び荒畑の前からぼんやりと姿を消した。

その様子を、荒畑は満足そうに見守った。

万全である。
この聖杯戦争に、荒畑の負ける要素が見当たらない。
比肩するものがいないであろう強力なサーヴァントを従えたことによる自信。
そして、自分の身体の特殊な呪いとも加護とも言える能力。

もう一度、荒畑は令呪を優しく撫でた。

「この聖杯戦争は、出来レースなのだよ」

荒畑は凶悪に歪められた笑顔で静かに夜明けの太陽を見守る。

荒畑　草庵。この島の唯一の医者にして、年齢も分からぬ最高齢。その実、この男は正真正銘、魔術師などではない。

だが、荒畑は島の住民の、マンガや小説の影響を受けた人間の中でしばし話題の中心になることがある。

何も娯楽のないこの島では、会話が切れても話が盛り上がる数少ないネタだ。多少は尾鰭、背鰭、腹鰭まで付いているかもしれないが、こう呼ばれていた。

――『不死身の男』と。

まあ、誰も本気で信じてはいないが。

プロローグ6　不死身の男（後書き）

どんなサーヴァントが呼ばれるか想像してみても面白いかもしれませんね。私自身、また二つのクラスは決定していないので早く考えないと。

今回もアサシンのサーヴァントを出しましたが、さて、伝わるかな。

プロローグ7　変質者（前書き）

私は全クラスの中で一番好きなのはライダーです。

どうでもいいですねゴメンナサイ。

そして重ね重ね、即効大きなミスを発見。いきなり修正させてもらいました。

プロローグ7　変質者

†

「あひゃひゃ、あひゃヒャひゃヒャひゃヒャ――……」

世界的に有名な某ネズミキャラクターが薬中になったら出すような笑い声で、昇ってくる太陽にも目もくれず男はひたすら砂浜の砂を掘り起こしていた。スプーンで。

それでも、手足を曲げたら身体が一つスッポリ入るくらいの大きさの穴が出来ているので、かなり頑張ったと言えよう。努力の注ぎ方を間違っている良い例だ。

着ている服は所々がダラしなく破れており、男の肋骨の浮き出た不健康そうな肌を露出している。まさに残念サービス。

バサバサに伸び放題の髪に不潔な無精髭。顔色も酷かった。頬は痩せこけて影が出来ており、顔の肉が減っているので眼球が前に出ている。ガサガサに乾いた唇も見ていると、保存の良いミイラの方がよっぽど健康的に見えるだろう。なまじ動くだけに、非情に気味が悪い。

――男は壊れていた。

かつて自分には家族がいたのかも、どんな仕事をしていたのかも、自分の名前すらも、全ての記憶が壊れていた。空っぽの心に残ったのは、ただその破壊されたという行為の矛先を、今度は別の何かに向けるだけ。

今まで何を壊して来たのかも覚えていない。

――そういえば、木を切り倒し続けたような、
――そういえば、自販機を一つ潰したような、
――そういえば、車を一台海に捨てたような、

なかなか混沌とした経歴を持っている。
それでも、自分の破壊すべきものだけは鮮明に、そして確固たる意志をその心に刻み込んでいる。
文字通り、それは使命というもの。

男は、この島が大嫌いだった。

スプーンで砂浜を掘るという行為も、これは彼にとっての島の破壊行為の一つ。
計画では砂浜を掘り起こし続け、いつか島の砂浜を脆くし海水を浸水させやすくする。そして、水分を大量に含んだ砂質にすることで、徐々に地盤を脆くし液状化させる。後は直下型の巨大な地震があればこの島は海に沈めることが出来るという、底知れぬ程に残念な計画。

でも、自身の計画の完璧さを信じてひたすら砂を掘り続ける男だったが、突然ピタリと、掘る作業をやめてしまった。

「はひゃひゃ、疲れたぞー。これじゃあー、こうてぃつ（効率）が悪いなー」
男はようやく気づいたのか、まるで子供がオモチャを飽きたようにスプーンをポイっと捨てた。

侑芽島沈没作戦は失敗に終わった。始まっていたのかも怪しいが。
だが、男の賞賛すべき点は、それは野望に対する執着力の強さだ

ろう。
彼はこの野望が成就のための行動において一度たりともぶれた事はない。方法があまりにも稚拙というか、ちょっとアレなだけだ。
多角的な視野を持ち、一つの方法がダメなら次は違う切り口から挑戦する。
男が科学者のような探求者であれば、あるいは大成したのかもしれない。もしかすると、かつては科学者だったのかもしれない。でも、男にはもはやそんな記憶はない。
それでも男はこの島の破壊に力を注ぐ。たとえ、何年かかっても。
男は、侑芽島の中央に存在する山が視界に入った。
そして、新たなる計画が脳裏に閃いた。
「コンドは、山を切りくとぅ（崩）すゾ」
山を切り崩す。それが環境に及ぼす影響は大きい。雨が降り、森が減ることで吸収できなかった大量の水は島に押し寄せる。この島は地震や水害に弱い特性上、地盤が緩めばこの島はいずれ地図上が消すことも不可能ではない。
そんな愚かで無謀な計画を思いつく。それでも、男は自分の計画に心酔して実行する。
そして、無茶苦茶に酷使し、どこもかしこも痛みが走る男の身体。その身体に、一つや二つの異変などに気づけるわけもなく、ましてや汚れ、血が瘡蓋（かさぶた）になって手にこびりついていたら、気づく事もあるまい。
男の右手の甲には、戦争の参加の証があることに。

「島の破壊すレばヨー、島を破壊すレばヨー……あレ？　何だっヶ？　どうなっちまうんだっヶ？　何で破壊するンだっヶ？　……まァ、いィじャねー。壊しちマえば、いいジャねー？」

今日も男は破壊という目的のためだけの一日を迎える。
なぜ島を破壊しなければならないという理由を失っても。

プロローグ7　変質者（後書き）

後少しでプロローグも終わる。

そして主人公はいつ出るんだろうね。ちなみに次でも出ません。

次はねー、まあー、個人的に一番出したいキャラクターだったからさー、とりあえず出してみたーって感じ。

とりあえずガンバー。マラソンで言うと、今でようやく3キロくらい？　いや、6キロ？

プロローグ8　嘘つきと呼ばれた魔法使い（前書き）

就活が本当にうまく行かないわ～。
おまけに気胸になる始末。正直、これは予想できなかった。
もうちっと身体を労りたいけど、履歴書を書かないといかんし、あー、最悪のジレンマ。
公務員を目指そうかな・・・（↑負け組フラグが立ちかけ）
とりあえず、かなりパパッと書いた。こっちは続けたい。
俺の肺に穴が空こうと、この作品は続けてみせる。

ちっとだけ修正します。この魔法使いの聖杯の求める理由を変更しました。物語自体に大きな変化はないです。

プロローグ8　嘘つきと呼ばれた魔法使い

†

当然だが、魔術協会から誰も派遣されないなんてことはない。むしろ、この情報を掴んだ協会が、生徒に遅れをとるなんて事は断じてない。前日の誰もが寝静まった深夜に、女はこの島に到着し、既に準備を始めていた。

魔術協会お抱えの特別講師――ディアーヌ・マルシア。

長い金色の髪。サングラスに隠れた青い瞳。通った鼻筋。出るところは出て、引っ込んでいるところは引っ込んでいる最高のプロポーション。上下も、金を惜しげもなく使ったオーダメイドの自慢の一品。

「『令呪』は、出てこないか。聖杯に嫌われたかな」

どこか自嘲気味に笑った。

「まー、当然かもしれないわね。ペテン師には相応しくないってことかな」

魔術協会から派遣、もとい左遷されてきたディアーヌは、魔術協会の抱える問題の一つだった。

ディアーヌは魔術師ではない。魔術協会に所属しているのだから、一般人というわけでもない。

彼女は魔法使いだった。

ただし、ディアーヌは本来の魔法使いとは少々意味合いが異なる。

というより、魔術協会ですら、彼女は本当に魔法使いであるのか断定できないでいた。
ディアーヌ・マルシア。彼女は世間からこう呼ばれていた。
偽魔法使い（マントゥール）――嘘つき、と。
唐突だが、ここで1つ問題を出してみようと思う。
【ある部族には、必ず雨が降ると言われている雨乞いの踊りが存在する。では、それはなぜ？】
別にその雨乞いの踊りに特別な力が宿っているわけでもなければ、踊り自体に特別な仕掛けがあるわけでもない。
じゃあ、何か？
答えは簡単だ――雨が降るまで踊り続ければいいだけだ。
他にも出してみよう。
ある予言をする――「お前は、病気になる」と。
さて、その予言はきっと当たる。別に『いつか』は断定していないのだ。なら、『いずれ』病気になるだろう。
彼女の魔法とは、つまりこれである。
例えば雨乞いの踊りだ。この踊りが『原因』で雨が降ったのか。それは誰にも分からない。
つまり、因果関係がはっきりしないのだ。因果を繋ぎ止めている根拠というのが一切ない。

雨が降ると予言をする事なんて、誰にだって出来る。ただ、それが明日か明後日かを正確に見極めるには難しいだけだ。

つまり、断言してもいい。誰にだって魔法使いになれる素質は有しているのだ。ただし、『嘘つき』と呼ばれるであろうが。

そして、彼女が偽魔法使い（マントゥール）――嘘つきと呼ばれる所以はこれである。

確かに、奇跡を知らぬ人間には、ただのペテン師の類にしか写らないだろう。断言せず、どんな捉え方でも出来る曖昧な答えを出すのは、ペテン師の十八番なのだから。

ただし、逆に魔術協会の中ではその評価はひっくり返り、むしろ彼女は憧憬を通り越して畏怖の対象として見られる事もある。

そもそも、手からガンドを飛ばしたり、水銀を変幻自在に扱ったりと、このような分かりやすい魔術だけが魔法の系統ではない。

魔法の系統はたくさん分岐しており、近代魔術だけでもクロウリー派と呼ばれる近代魔術だって存在する。

そして、彼女の魔法とは極めて古いものであり、ある意味、これが本来の魔法である。

目に見える魔法ではなく、目には見えない魔法。

呪いや、不運を招いて怪我をさせたりと、直接ダメージを与えるような事なんてしない。

むろん、手からビームを出して攻撃できないのでは、火力としては不足するし、言ってしまえば戦闘には不向きと言える。

だが、呪いといったものを完全に防ぐことは、その実かなり難しい。いつ忍び寄ってくるかもわからない存在を対処するとは難しいものなのだ。おまけに、それが本当に魔術的な要素が含まれているのかも分からなければ、対策の取りようもなくなってくる。

ディアーヌの力は、自分の口にした事を全て現実のものにしてしまう力。

嘘から出た真。

完全に遅効性の必殺の呪い。

魔法の範囲も規模も一切不明にして特定も出来ない。

どんな人間に対しても、彼女に『死』を予言されたら、それを防ぐ手だては存在しない。

まあ、当たり前だが。人間はいずれ死ぬだから。

もし彼女の力が本物であれば間違いなく封印指定に登録されて当然なのだが、如何せん、さっきも言ったように因果関係が分からないのだ。本当に彼女が魔法使いなのかも怪しい。

『空想具現化』とは違う。彼女にはそれほど強大な力はない。

ディアーヌが出来ることは『現実に起こりえる範囲内での事象を現実の物にさせる』というものである。それは完全に確率を覆し、例え１％を下回ることですらも例外ではない。

もちろん、これだけの事実なら彼女を誰も魔法使いだなんて認めない。むしろ、魔術協会に矜持に欠けても、こんなペテン師を魔法使いだなんて認めようとしない。

だが、彼女が魔術協会総本山時計塔の一人の生徒であった時の話

だ。

ディアーヌはお世辞にも特別秀でた魔術師ではなかった。むしろ魔術回路の本数も数本しかなく、むしろ時計塔に招集された経緯すら分からなかった。

だが、ディアーヌの奇行を知らぬ物はいなかった。そして最も有名な物が、『魔術協会の重鎮となる』とのこと。

誰もが鼻で嗤った。お前には、それほどの才能はないと。

だが、今の彼女はどうだ？

若くして特別講師という地位を得てもなお、彼女の快進撃は止まる気配がない。

彼女の周りでは全ての確率が歪んでいる。言ってしまえば、何が起きてもおかしくはない。

人が壁を通り抜けられる。これは１００の４０乗分の１だから、確率的には起りえる事であり、つまり、彼女の力が本物であれば、通り抜ける事を可能にしてしまう事だってある。

その事実に、魔術協会は彼女の存在をようやく危険な存在と認知したのだが、それでも扱いに困っている。

魔法使いか、魔術師なのか、それともただの嘘つきなのか。

魔術協会はディアーヌに発言権というものだけは与えていない。裏を返せば、それは彼女の力を恐れてのことであり、つまり彼女の力を認めているということ。

ただ、ディアーヌ自身、自分が本当に魔法使いに呼ばれるに相応しい人間かどうか分からない。

彼女自身、この曖昧な自分を断ち切りたいとは思っていた。この聖杯戦争には興味があったし、聖杯の力を危険と判断すれば、回収しようとも考えていた。この聖杯は探求に加えて、新しい世界を踏み込む大きなチャンスであった。

〈ペテン師と呼ばれようと、嘘つきと罵られようと、彼女には夢がある。愚かしく、嘆かわしく、哀れな夢が。

確率をねじ曲げる力をもってしても、届かぬ願い。

理想に生き、現実に殺される。ならば、聖杯に縋るしか他がない。〉

令呪が発現しないところ、ディアーヌはマスターには相応しくなかったようだ。

この事実は多少ショックではある。まさか門前払いを食らうなんて。

だが、ディアーヌという女はこの程度でこの島を立ち去るような脆弱ではない。

伊達に周囲から嘘つきと虐げられて生きてきた。辛い目にもあってきたし、魔術協会では昔からずっとバカにされて来たのだ。この程度の現実でどうにかなることはない。

「見てなさい。サーヴァントなしで、この聖杯戦争を勝ち残ってみせるわ」

自分に暗示をかけるように強く呟く。

この島の散策に乗り出そうとしたとき、不意に空を眺めた。

夜が空け、雲も一つない快晴の空。だが、ディアーヌはぽつりと呟いた。

「嵐が来そうね」

この適当な天気予報に根拠などない。そして、この侑芽島にはすでに１００年近く台風といった物が通る事もなかった。

だが、起こりえる可能性はあるのだが。

凪のように静かな天気が、ゆっくりと、ゆっくりと、侑芽島にその凶悪な牙を向ける事は、適当な予報をした本人すら知らなかった。

この聖杯戦争に、唯一令呪なしで挑む最悪のトラブルメーカーがついに参戦した。

ディアーヌは再び自分に暗示をかけるように目を固く閉じ、呟いた。

「私は、誰にも負けない」

プロローグ8　嘘つきと呼ばれた魔法使い（後書き）

修正部分は◇で閉じられているところ。

この定義の『偽魔法使い』という存在は現実でいますしね。
神秘の秘匿ということにもあまり関心がなさそうですし、この当りが魔法使いとしては相応しくないのかもしれませんねー。というより、適当に予言してるだけだから、神秘もクソもないのかな。

とりあえず、プロローグは次で終了予定。

たまに賞に出したりするけど、こんなプロローグの長い作品なら、たぶん一次選考も通過しないだろう（キリッ

もう少し落ち着いたらしっかりと練って書きたいが、しばらくは無理だろうなー・・・

大手は厳しいし、中小は締め切りに間に合わず履歴書を出し損ねたところとか、落ちたところとか、うわー、マジで心折れそう。

この心境でダークファンタジーを書いたら、マジでドロドロのものを書けそうな気がする。

エピローグ・オブ・プロローグ　その1　島の守り手（前書き）

次でプロローグが終われそうだ、やったぜヒャッホーとか浮かれてたけど、無理だった。

得意の言い訳を使わせてもらうと、うん、まあ、忙しかったんだ。でも、一週間以上空けるのはちっとダメだよねと自粛。

とりあえず、次か、その次で終わらせる。パパッ仕上げて、早く本編に入りたい。

エピローグ・オブ・プロローグ　その1　島の守り手

†

最近、侑芽島を賑わせるさまざまな黒い噂の数々。
一つ、自分と全く同じ姿をした、真っ黒の自分と出会う『ドッペルゲンガー』。
一つ、島を破壊しようといろいろと画策する哀れな変質者。
一つ、不死身と噂される医者の若さの秘訣。
などなど他多数。

この島はとりあえず『怪奇』と呼ばれるような物が跋扈している。
それは人が住んでいるが故に生まれる、言ってしまえば生活臭のようなものでもある。

その内の一つに、この島を夜な夜な徘徊する男の噂もある。
それは別に夢遊病なわけでもなければ、意味もなく夜分遅くに出歩いているわけでもない。

『彼』――志都美（しずみ）　怜（れい）。女性のような名前だが、男である。
その容姿は異邦人の血が見て取れ、実際、彼はハーフだった。その少し窪んだ目に、高い鼻、茶色の髪はその印象を強めた。
彼はこの島に住む、もう一人の医者とも言えた。
ただし、彼が看るのは人ではない。
言うなれば、彼はこの島の医者である。
島の医者――それは地脈や水脈、霊脈や龍脈といったエネルギーの乱れなどを看るということ。
ただし、怜にはそんなものを診察する方法は知らない。ならば、

彼はいったい何を看ているのか。

怜はだてに自称、島の医者を名乗っているわけではない。

なぜなら、この島の異常性に気づいている珍しい住民とも言えたからだ。

この島にはさまざまなエネルギーに加え、特に特異な大きな力が島中を流れていた。彼はそれを『黒脈』と呼んでいた。

男は山の麓の洞穴に入り、そのエネルギーの交流ポイントにいた。

周辺はさまざまな機材が置かれ、本人ですらいったい何に使うのか理解が届かないものがある。

元々、ここは父と母が使っていた研究所だった。それを、勝手に怜が借用しているにすぎない。

日課の調査の結果から、このエネルギーには安定というものがなく、真夜中が最も活発になり、明け方にかけて徐々にそのエネルギーが衰退する。そして、また真夜中を迎える事でピークに達するという周期性があった。

それはまるで、闇のような夜を歓迎し、その闇を拭い去る太陽の光を避けているかのようだった。

こんなエネルギーを毎日調査していると、島ではどうやら夜な夜な徘徊する怪しい人のような扱いを受ける事が多くなった。別段、それが不満でもないし、理解されなければそれでもよかった。

その真夜中から明け方にかけてのエネルギーの変化量を見ているのだが、今日は普段とは違うことに気づいた。

「少しエネルギーが減ってる？　――いや、ただの気のせいかな？」

彼の言う少し――それは、プールのような巨大な容器に大量に入った水が、わずか1リットルだけ減ったような小さな小さな違い。取るに足らないような、そんな変化。

だが、その毎日のように調査する彼に取って、その極小とも言える変化が気になった。

特にここ最近、この侑芽島は過去にないほど活発な動きを示している。

まるで、何かを歓喜する――翌日に遠足を控えた子供のようなものが伺える。

もし仮に憶測が当たっているのなら、近いうちにこの島で何か異変が起きる。それも、この島全土を巻き込むような、大きな異変。

彼が願うのは、あくまで平穏。この島の調査も、島に平和の守るため。さらに、彼は島の『ドッペルゲンガー』の正体を探るのは、これが一番の近道だと信じている。

根拠などない。だが、間違いなくこの島の異変は昨今を騒がす『ドッペルゲンガー』に繋がるという自信があった。

そして、誰も気づいていないだろう。この島に隠されている、大きな秘密。

ゆっくりと怜は膝を付き、本日最後の調査に入る。

地面から突き出ているパイプに腕を入れ、その『黒脈』の流れに手をかざす。
頭の中に、この黒脈の流れる世界図のようなものが流れ込んでくる。分岐し、この島を張り巡らせるは、まるで人間の神経系。あるいは毛細血管。

――もしくは、魔術回路。

目を閉じてゆっくりと呼吸を整え、心を落ち着かせた。
すると、怜の腕に幾筋にも奔る光の回路が現れた。
それは強い光を発する箇所もあれば、逆に鈍い黒々とした光を発する箇所と、疎らに存在してた。

怜は自分の身体に巡る魔術回路の存在を自覚し、さらにそれを僅かではあるが魔術を扱う事が可能だった。この力を持って、黒脈の流れという物を察知していた。

怜の母親は、この島にやってきた魔術師だった。彼の魔術回路はその母親から引き継いだもの。
そして、この島の異常性と黒脈の存在をいち早く気づき、そのように命名したのも彼女だった。

怜の身体を巡る魔術回路。だが、その回路はワケあって本来の魔術回路とは異質のものへと変貌している。

結論から言おう。

侑芽島の異常性の一つ。

それは、この島に生まれ育った者は例外を許さず?全員が魔術回

路を持っている？のである。

それも普通の魔術回路とは違う、異質のものを。

エピローグ・オブ・プロローグ　その１　島の守り手（後書き）

水脈とか地脈の知識は皆無です。はい、かなり適当です。

とりあえず、島の異常性をこれから幾つか展開できたらなと思ってますはいはい。

ここからは個人的なお話。

まーねー、現在社会に出て働いている人が、こんな面倒な就職活動を経験してるのかと思うと、なんだか世の中を不思議に思う。

嫌々で就職活動をして、社会に出たら辛い仕事が待っているのって、本当に人生って不思議だと思う。

言うなれば、なぜ人は働くか、ってことなのかなー。

面接ではこのパターンの質問の答えは用意してるけど、それは本心じゃないし、釈然としない。

うん、以上、独り言でした。

じゃあ、また一週間以内に続きをかける事を願ってさようなら。

エピローグ・オブ・プロローグ　その2（前書き）

なんとか時間を作って更新した。

春期講習がダルい・・・。子供が一生懸命勉強してる以上、俺もやっぱり誠意を持って接しないといけないんだけど、就職活動との並行作業だと本気で辛い。

とりあえず、スパパって書き上げた。

エピローグ・オブ・プロローグ　その2

この島に住む人間の身体を巡る魔術回路は、怜の母が持っていたものとは違い、底を見えない深淵の黒い色。それはまさしくこの島を流れる黒脈と極めて近い。

この黒い魔術回路と一般的な魔術回路との違いは、魔力の流れが極めてスムーズだと言うこと。だが、その魔術回路は開くことがなく、故にこの島の住民は自身の身体に流れる魔術回路に気づく事なく、平凡な毎日を過ごしている。

怜の身体を巡る魔術回路は、その黒い回路と本来の回路を混合させたようなもの。

それはまるで、銀と銅の導線を繋ぎ合わせたことに似ている。

だが、これは魔術を行使する身体としては最適だった。

本来なら開く事のなかった魔術回路は、一般的な銅の導線で無理矢理に開かせた。そして、その身体を流れるのは抵抗値が限りなく0に近い銀の導線。

怜の身体は魔術を、ほとんど抵抗もなく使用することを可能とする。さらに効率もよく、極めて燃費もいい。

だが、魔術的な知識をほとんど持たない怜にとっては、ほとんど宝の持ち腐れに近い。

この魔術回路と近い黒脈が流れるこの侑芽島は、ある意味大きな魔力の塊とも言える。

それが何を意味するのか。あるいは、それによって何か効率が良いのだろうか。

そして、近日中に何か大きな災いがこの島を襲う。

怜は自身の左手の甲に刻み込まれた『令呪』を、不安な心持ちで見やる。

これがなんなのかは知っている。彼の母親が魔術の世界に精通しているだけに、多少なりとも知識だけは備えていた。

――聖杯戦争。

むろん、詳細までは分からない。あくまで聖遺物（レリクス）である『聖杯』を手に入れるために命を賭して戦うということ。

そして、その『聖杯』は最後の晩餐で使われた『聖杯』ではない。最後の晩餐で使われた聖杯は『Ｈｏｌｙ Ｃｈａｌｉｃｅ』であり、この聖杯戦争で追い求める聖杯とは『Ｈｏｌｙ Ｇｒａｉｌ』。Ｇｒａｉｌ――それは幻。形のない何か。あるいは、人が追い求めし『夢』なのかもしれない。

かつての聖杯戦争に、ちゃんとした勝者はいたのか。あるいは、本当に存在したのか？

人は幻を追い求め、夢のために命を落とした。そして、そこから得たものは何もない。

聖杯戦争が招くは巨大な災厄。

幸せのない巨大な不幸。釣り合いのとれない両天秤。人の命は、吹けば飛ぶような羽毛のように軽くはない。

この島に、悲劇なんて招くわけにはいかない。

力強い足取りで下山し、そのままいつもの豪邸の近くの海岸に向う。
そこは、今日最後のチェックポイント。黒脈の流れを見る最後の地点。

夜が空け、太陽が昇る。

もう少しで海岸に着くというところで異常に気づいた。怜の耳に不穏な高速で回転するような機械音が流れてきた。

島の外から、ヘリに乗って誰かがやって来たのだ。

幻に魅せられ、夢を追い求める愚者。

知っているのだろうか。これは、過去の記録が語る以上に醜悪な戦争になりえることを。この戦争に勝者がいなければ、なんのために命を賭けるのか分からないということを。

「ただの観光であれば、すぐに帰ってもらおう」
怜は進行方向を返ると、ヘリポートに駆け足で向った。

†

そして、この島は終焉へのカウントダウンを刻み始めた。
7人のマスターに7体のサーヴァント。そして唯一、令呪もサー

ヴァントもなしで挑む無謀な者。

それを安全地帯から眺める姿を見せぬ――

エピローグ・オブ・プロローグ　その２（後書き）

とりあえずプロロもこれで終わり。

なんかもっと書きたい事があったはずだが、思い出せん。

あーあと、聖杯についての突っ込みは勘弁してください。『確か、こんな感じ・・・』程度のノリで書き上げたから、ミスとか多いかもしれない。

とりあえず、本編に入ったら、「ここをこうしたらいいよー」てきなアドヴァイスがあると嬉しい。私としてもまだまだ成長したいので、新しい技術や知識は貪欲に吸収して行きたいですし。

んで、ここからは個人的な話。

遊戯王、終わってしまったな。正直、涙が出そうなくらいに感動したんだけど。

初代、ＧＸと見て来たけど、やっぱり遊戯王は面白いわ。

で、次はなんだっけ？　ゼアルだったか。とりあえず、１話から見ようと思う。面白いと思うから。

遊戯王の映画のＢＤ、まだかな～・・・

参戦者リスト（前書き）

登場キャラが多い。私が普段作る作品のキャラ数が４から５人に対し、今回はそれを上回る。少し整理という名目で書いてみた。

参戦者リスト

【？？？？陣営】
マスター：　雅　真理
魔術協会で永遠の二番手。さまざまな思いを胸に秘め、一念発起に聖杯戦争へ参戦する。

サーヴァント：　？？？？

【？？？？陣営】
マスター：　東原　守
朱寺院　麗奈の執事。彼女を慕っているが我が儘な一面に悩む。

サーヴァント：　？？？？

【？？？？陣営】
マスター：　氷舞　涼夏
麗奈を心底嫌い、逆に稔に全てを捧げる覚悟のある朱寺院家のハウスメイド。武器、笑顔。

サーヴァント：　？？？？

【？？？？陣営】
マスター：　朱寺院　稔
生まれながら魔術回路の変異に悩まされる。その身体の魔術回路が災いし、半ば巻き込まれる形でこれから聖杯戦争に参加するように

なる。

サーヴァント：　？？？？（死神みたい？）

【アサシン陣営】

マスター：　荒畑　草庵

侑芽島で唯一の医者。かなりの高齢（１００歳を超えているらしい？）にも関わらず衰えを一切見せない。島の一部の者からは、不死身と噂されるほどである。真意は？

サーヴァント：？？？？

【？？？？陣営】

マスター：　不明（名前を忘却）

島の破壊に命をかける。しかし、その手段は稚拙にして少しアレ。だが、島の住人からは関わってはいけない変質者の地位を獲得している。

サーヴァント：　？？？？

【？？？？陣営】

マスター：　志都美　怜

島の医者にして、母親が魔術師というハーフ。身体を巡る魔術回路は、一般的な物と異質な物が混線しており、魔術師としての資質は高い。島の住民全員が魔術回路を持っているなど、島の秘密の一部を知っている。島の平和を望み、聖杯戦争を望まない。

サーヴァント：　？？？？

【令呪なし】
ディアーヌ・マルシア
現代に生きる『（偽）魔法使い』。現実に起こりえる範囲内であれば、その自称を全て現実の者に出来る魔法使い。世間体では嘘つきとも呼ばれる。逆に魔術協会ではそれなりの地位を得ている。
彼女にも、愚かしく叶えたい夢を持つ。夢の成就のため、参戦。

参戦者リスト（後書き）

とりあえず分からんところとか、まだまだ存在すら明かさないキャラは含んでいない（あ、言っちまった）。

とまあ、とりあえず、怜の特別なキャラクターの土台作りは出来たかと。さて、これからどうやって彼をチートキャラにまで持って行くか。

・・・本当にチートにするか未定だけど。

遭遇（前書き）

引っ越しも急遽決まり、家ではてんやわんや。落ち着く暇がない。

遭遇

海岸沿いにあるヘリポートに着陸してもらった。

不安定な空の長旅もあって、地に足がついた事にようやく安心感が生まれる。

長時間、狭い空間に押し込められていたのもあり、真理は肩下げのバッグを砂浜に下ろして両手を組んで空に向かってグッと背筋を伸ばした。時折、右に左にと腰を曲げて身体を柔軟する。その時、チラチラと姿を見せるお臍(へそ)や引き締まった健康的な腹筋は、とても目の保養になるだろう。

ふー、と息を吐き出しながら力を抜き、改めて海を眺めた。

潮の香りがする。酸っぱくも、どこか懐かしい匂い。母なる匂いって、こういうのかなー、なんてどうでもいいことを考えてみたりもする。

ひとしきり海と、その海から覗かせる太陽を眺めてから、ようやくバッグを拾い上げた。

「まあとりあえず、ちょっとこの島の観光でもしてみようかしらね」

特に当てもなければ、目下すべき事があるわけでもない。あくまで、聖杯戦争にて聖杯を手に入れる事だけに集中すればいい。それに、未だ真理の身体には令呪らしきものが発現しないあたり、戦争の開始はまだ先なのだろうと推測した。

とはいえ、土地勘がないのは戦争と名のつく戦いでは極めて不利になるのは必然。できるなら、戦争までには粗方この島の地図くらいは頭に叩き込んでいたい。

特に必要なのが、サーヴァントを呼ぶために必要となる祭壇といったものがある特別な空間。これは一朝一夕に出来る者ではない。なければ自分で用意しなければならないし、あるのであれば、そこを少し借りたい。

さて、右も左も分からぬ真理はどうしようかと悩んでいると、丁度いいタイミングで地元の若い男がヘリポートに姿を見せた。

真理は目敏く、好機とばかりにすぐさまその若い男に声をかけた。

「ねえ、ちょっとそこの君！　この島の住民だよね？　なら、島の案内を頼めるかな？」

†

この島を訪れた者を追い返そうと、怜は急いでヘリポートにやってきた。

そして、どうやら女だったらしい。

「ねえ、ちょっとそこ君！　この島の住民だよね？　なら、島の案内を頼めるかな？」

最初、その声が誰に向けられている者かで一瞬迷うも、この場にはヘリのドライバーに自分しかおらず、怜と女の視線が合って、ようやく自分に向けられているのだと確信できた。

しかし、追い返そうとしている人間に道案内を頼むとは、なんとも奇妙な話だ。

怜は女に歩み寄った。ファーストコンタクト、感想、綺麗な娘。だが、それでも怜は率直に、躊躇なく、ばっさりと一蹴するかの如く強さで言う。観光気分であれば、すぐさま出て行ってもらう。

眉を吊り上げ、眉間に皺を寄せる。相手を威嚇するように睨みつけ、一歩一歩、歩く度に地面に足をめり込ませるくらいの意気込みで強く踏みしめる。

そして、腹の底から出すように空気をため、一気に怒声を爆散させた。

「今すぐ帰れっ！」と。

「えっ？」

さすがにその一言は女にとって予想外だったのか、目を丸くして固まってしまった。

遭遇（後書き）

ごめん。眠たくてもう無理。

とりあえず、まー、なんだ。眠い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1082r/

Fate/amusement facility

2011年10月8日18時13分発行